



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

小西加保留先生との思い出

著者	大谷 京子
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	10
号	1
ページ	17-20
発行年	2018-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027432

小西加保留先生との思い出

日本福祉大学 大 谷 京 子

はじめに

小西加保留先生が関西学院で博士論文指導をしてくださった第一号というご縁かと思いますが、ご退職記念号に執筆する機会をいただきありがとうございます。先生から私が直接ご指導いただいたのは、2007年度から11年度までの5年間です。ゼミはなく、ずっと個別指導でしたから、他の学生との様子や集団の中での先生を存じ上げません。密室の中での小西先生を綴らせていただきます。

1. 小西先生との出会い

小西先生に初めてお目にかかったのは、私が修士の院生だった頃、兵庫医大での聞き取り調査と入院患者さんへの家庭教師のアルバイトで伺ったときでした。ほとんど接点はありませんでしたが、「白衣を着たちゃんとしたMSWさんだ」という感慨をもって眺めていました。先生のお噂は折に触れその後もお聞きしておりました。入院中だった荒川義子先生のお見舞いに伺った際、先生の後任に「すごくいい人が来てくれるのよ」と嬉しそうに話しておられたのも、後から思えば小西先生のことでした。「名前は言えないんだけどね」と、言いたそうにうずうずしている雰囲気荒川先生の笑顔に、これほど評価されている先生ってどなただろうと興味津々でした。

私の博士課程入学は2002年度でした。満期退学後、指導教授の高田眞治先生が天国に召された後、「指導は引き継ぐので心配しなくてもよい」と芝野松次郎先生がお心を砕いてくださいました。2006年度に就職をした私は、ほぼ1年間、研究を進めることができずにおりました。その後、芝野先生から、小西先生に指導教授をお引き受けいただいたとうかがいました。当時、小西先生も関学にいらっしゃって2年目、博士号を取得されてすぐの時期で、入学して5年も経過している、他の先生の指導を受けてきた私は、さぞ大きな荷物だったろうと想像します。

初めての指導の日、お約束の時間の5分前に院生室を出て、先生の研究室の近くで時間を待って、あんまり「時間ぴったり」も印象が悪いかなどと逡巡して、研究室のドアをノックしました。先生はBig smileで迎えてくださり、お茶とお菓子も用意してくださっていました。先生にお会いすることに緊張していたのに、先生にお会いしてほっとするという、おかしな感覚でした。一瞬で溶かされるような、温かい空気に包まれるような、「安心感」を、初日から味わっていました。

2. 博士論文指導

小西先生から受けた5年分の個別指導の記録は、A4で38頁あります。Eメールでのご指導もずいぶんいただきましたので、それらも合わせると膨大な量になります。最初に先生に見ていただいたときは、まだ先行研究レビューと2つの質的調査が終了した段階でした。「知りたいことを知り、示したいことを示していくために、研究デザインを今後どうするか要検討」というコメントをいただいたと記録にあるように、筋道が定まらず、思いだけが先行する状況でした。私にその自覚はありませんでしたが。入学してから5年も経っているのにこの状況かと、小西先生は、かなり頭を痛めておられたことでしょう。私は全く気付いておりませんでした。小西先生のご指導の特徴を、①忍耐、②アセスメント、③ソーシャルワーカー魂の3点からお示します。

①忍耐

指導記録には、「小西先生がご助言くださった枠組み作りは何のために必要だったんだろう？」といった、私のとげけたコメントがところどころに出てくるのですが、この物分かりの悪い私に、繰り返し、何度も何度も同じことを、違う言い方で、異なる方向から、助言の雨を降らせてくださっています。半年空いて、同様のコメントをしてくださっていることもあり、このときの先生の堪忍袋は伸びに伸び切っていたと思います。今更ながら、先生には本当にご苦勞をおかけしたのだと、申し訳ない思いでいっぱいです。

②的確なアセスメント

先生のご指導は、研究的に的確であるだけでなく、その時の私の状態をも的確に捉え、サポートしてくださっていました。

曖昧模糊とした実践課題を、研究の枠組みに置き換えるのにも苦勞しました。「質の高いソーシャルワーク実践」を探究していたのですが、「自己規定も関係も含んでの実践ではないのか?」「成果物をどういう場面でどう使いたい?」「関係性モデルを作成したいのか?」など、研究の言語に、実践感覚を落とし込むために、多くの問いを投げかけてくださいました。感度の悪い私はなかなかうまく反応できていないのですが、そういう私の力量も踏まえて、粘り強く付き合ってくださいました。

私が、どんどん一つの考え方に凝り固まっていくようなときには、思考を広げるために、多角的なアイデアを提供してくださいました。それも、「今のあなたの言うモデルでは、危機介入のときの支援は説明できないのでは?」というように、実践をイメージしながら研究を進められるような形で助言をしてくださっていました。また「省察」といった気に入った概念を見つけては、そちらにずぶずぶと踏み込んでいく私に「帰ってこ〜い!」と絶妙なタイミングで声かけしてくださいました。ソーシャルワークの固有性や専門性にも執着していましたが、「関係性を軸にすべきでは?」とコメントくださったのも小西先生でした。私の博士論文のタイトルです。先生に言われるまで自分の研究の核として定められなかった自分にも呆れますが、私が明らかにしたいことの核心を（きっとしびれを切らして）突いてくださいました。

質問紙調査は、質問紙を作るまでが勝負で、郵送してしまった後は取り返しがつかないと学んでいた私は、プリテストの前にも予備のテストをするほど慎重に進めていました。「プリプリテスト」と呼んで先生に報告すると、さすがにこのときはあきれ顔をされていました。いよいよ全国調査の段になっても、ねぶねぶ先行研究を読み続け、項目の推敲を重ね続けてなかなか質問紙を完成させられない私には、「いいかげんにしなさい!」とお尻を蹴ってくださいました。データ収集後の因子分析で、1つ1つの項目に思い入れが強すぎて、統計的には削除すべき項目についても捨てられない私には、「割り切ることで新たにクリアに言いたいことがあるかもしれない」と進むべき方向を示してくださいました。

時には具体的にやるべきことを提案してくださいました。「考えのプロセスが残るように、メモを残しておくように。それが後で考察に使える」といった、細かいところまで教示くださっています。「あなた作文、下手なのよ」と、赤ペン先生のように細かく文章を直してくださいしたこともあり。修正した文章と元の文章を比べて、「確かに端的に分かりやすい文章になっているのは分かるけれど、どうすれば次からこんな文章が書けるのか分からない」という私のコメントが残っています。

このプロセスは、スーパービジョンでスーパーバイザーがバイジーの力量をアセスメントしながら、自分で気づくように促すところから、気づきが悪ければ示唆し、それでもダメなら教示するという流れと同じだと思います。私の力を極めつつ、そのときどきに私がクリアしなければいけない課題を、私がクリアできる程度の大きさに切り分けて、提示してくださっていたのだと思います。

③ソーシャルワーカー魂

言葉にしなくても、ソーシャルワーカーとしての思いを先生は先に分かっていたくださるということも、心強かったです。現場実践10年を経て博士課程に入学した私には、この10年は研究としてはプランクのように感じていました。高田先生は、私の経験を宝物のように扱ってくださり、理論的根拠なく経験

から主張する私に、「君は本当に分かるんだろうね」と、ほんの少しだけ羨ましそうに（全くそんなことはないのですが、私にはそう見えました）認めてくださいました。おかげで、私は自分の10年を卑下せずにいることができました。そして小西先生からのコメントをいただく中で、私が実践で培った感覚が間違っていないということの保証と、それをいかに研究に組み込むかの作法を学んだと感じています。

ソーシャルワークにおけるワーカーと当事者との関係性が私の研究テーマでしたから、「関係性は、時々異なる場合と、いつも大事にしている、常にある関係とがあるよね?」、「医師もパートナーシップを謳うけれど、ソーシャルワーカーのそれとは異なるのでは?」といった、先生のご経験に裏打ちされた（と私には感じられた）コメントをたくさんいただきました。また先生のMSW領域と精神保健福祉領域の差異も指摘してくださいました。そうした問答の中で、実践感覚と研究を行ったり来たり繰り返してくださったので、何となく、ちょっとずつ、両者を統合していくプロセスを身に着けていけたのだと思います。

研究は本来孤独な作業だと思うのですが、私は博士論文を書いている間中、ずっと先生と一緒にいてくださる感覚を味わっていました。「不思議なことに」と思っておりましたが、記録を振り返ってみますと、まさに、私が迷う時も壁にぶち当たった時も、調査が終了した時も、いつもコメントをくださっています。「先輩からこんな指摘をされました! どうしたらいいでしょう?」、「ある先生からこんな助言を受けました! 方向を変えなければいけないのでしょうか?」等々の私のSOSに対して、その都度、「それはこういう意味では?」「この部分をこうすればいいのでは?」と助言を受けています。まるで幼稚園児のように、出迎え、送り出していただいていたように思います。不思議なことではなく、小西先生がそのように伴走してくださったのだと思います。

3. 小西先生から学んだこと

立ち方

私にとって小西先生は初めから今に至るまで、師でありソーシャルワーカーです。

今でも学会などで目にかかりますと、私の論文に関するコメントをくださり、お声かけくださいます。単に研究としてではなく、「私」に関心を持って見てくださっていると感じます。精神障害当事者に理想のワーカー像を尋ねたときに、「仕事の対象ではなく、人として接してほしい」と言っていたことを思い出します。先生は、仕事の対象としてではなく私個人に関わってくださるように思いますし、私の研究よりも、私個人を思ってくださいるように感じています。脳内お花畑系の私の自意識過剰かもしれませんが、私がそう感じているという主観がこの場合は大切だと思います。先生のソーシャルワーカーとしてのスタンスは、教員としても同様で、相手が誰であれ人として尊重しておられるのだと感じます。

私も教員ですが、クライアントではない学生に対して、どのようなスタンスで立てばいいのか、いまだにつかみきれていません。クライアントなら目標設定から一緒にやれますが、学生は一定の目標が既定されています。しかも本当はその目標を目指していない学生も、目指したくない学生も、目指せない学生もおります。自分はソーシャルワーカーとしてのアイデンティティは持つものの、教員として存在し、支援契約をするわけではないので、学生に対していわゆる「支援」はしてはいけないのではないかと、未だ悶々としています。それでも、小西先生にご指導いただき、学位取得後も時折の関わりから、私はモデルを間近に見せていただけているのだと感じます。ときどき「小西先生ならどう言うかな」と考えながら学生と対峙しています。

研究に対するまなざし

今年度の日本ソーシャルワーク学会34回大会の学会企画シンポジウム「現代日本のスペシフィックな社会福祉問題とソーシャルワークの専門性～専門性の『越境』に対して、改めてジェネリックなアプローチを探る～」において、シンポジストとして小西先生は、「SW アドボカシーの可能性－環境アセスメン

トによるミクロ・メゾ・マクロ SW 実践への展開」と題してご発表されました。そのご発言に大いに興奮しました。その感覚は、私が博士課程入学してすぐに味わったものに似ていました。

高田ゼミは、ゼミ生がそれぞれの研究を発表し、ゼミ生同士で議論し、先生からご助言をいただくというスタイルでした。膨大な実践知を丁寧に形式知に置き換えている 2 学年先輩の院生のご発表を聞いた時、「これが研究というものか！」と衝撃を受けました。「感動しました！！」と、研究に対するコメントとしては不適切な私の叫びに、高田先生が「『感動』ですか？」と笑っておられたことを覚えています。それから 15 年、多くの研究を見聞し、その作法にもずいぶん親しんできましたが、小西先生のご発表には震えました。先輩からは、「自分の言いたいことを研究の言葉にする」やり方を学び、小西先生からは、「私の言いたいことはこんな風に表現できる」というお手本を見せていただいたのだと思います。

さらに、私は語る人のスタンスに痺れるのだと思います。そのときの先生のテーマは、「アドボカシー」「環境アセスメント」でしたが、社会福祉の課題に向かう先生のポジショニングに共鳴しているのだと思います。先生も言及しておられましたが、ソーシャルワーカーのアイデンティティはずっと課題にされつつ明示されてはいません。それでも、先生の課題に向き合う目線にソーシャルワーカーの専門性を感じるのです。研究者のスタンスにはさまざまあり、その多様性もまた社会福祉学を推し進める原動力になるので重要だと思います。ただ私は、自分も、ソーシャルワーカーであるという自分のアイデンティティを基にした研究がしたいのだと気づかされました。

これからも、遠く先を歩かれる先生の背中を見ながら、先生の視界に入るあたりをウロチョロしていると思っています。